

第3回(2012年)日本鳥学会黒田賞受賞講演

黒田賞は、日本の鳥類学の発展に貢献した黒田長禮・長久両博士の功績を記念して、鳥類学ですぐれた業績をあげ、これからの鳥類学を担う若手会員に授与されます。第3回受賞者として、応募者の中から同賞選考小委員会で審議のうえ評議員会で山浦悠一氏が選定されました。

山浦悠一氏は、森林の管理と鳥類多様性の関係を、優れた解析やモデルを構築することにより研究してきました。その結果、人間による土地利用が広域的な鳥類分布に果たす役割を明らかにし、鳥類保全に重要な科学的根拠を示しました。その成果は、*Ornithological Science* 誌をはじめ、*Journal of Applied Ecology*、*Oikos*、*Biological Conservation*、*Conservation Biology* 誌など主に生態学関係の国際的な学術雑誌に15編の原著論文として掲載されています。これらの一連の研究は保全科学の分野で高く評価されるものであり、鳥類学上の重要性は高いと判断されました。

今回の受賞内容は総説として、日本鳥学会の学会誌に掲載予定です。なお、受賞者には賞状と、黒田基金から賞金10万円が授与されます。

受賞者のプロフィールと略歴

1976年11月3日生まれ。典型的な山村である長野県小諸市御牧ヶ原の自然の中で育つ。父と地バチを探しに山を歩いていたとき、背丈ほどの高さにある苔の塊がエナガの巣だと教わった。中学生のころ、裏のアカマツ林が間伐され、猛禽類が一時的にいなくなったのを見て、自然は人とともに変わりゆくものだと感じた。

岩手大学農学部森林科学科在学中、岩手県立大学の由井正敏先生の指導のもとに卒業研究を行い、2000年3月卒業。4月から東京大学大学院農学研究科の樋口広芳先生の元で修士課程を終え、長野県職員として一年間務めるが、研究にもう一度チャレンジしたいと考え、2003年4月より同大学院博士課程に進む。2006年3月、博士論文「森林景観における生物多様性の保全に向けてーランドスケープの視点の有効性の検討ー」によって学位取得。

2006年4月より森林総合研究所非常勤職員、非常勤特別研究員をへて、2009年4月より学振PD、2010年4月より北海道大学大学院農学研究院助教(環境資源学専攻・森林生態系管理学講座)として在職中。森林の管理と生物多様性の関係に最も関心があり、鳥類だけではなく植物や昆虫を対象とした研究も行なっている。

森林・林業と鳥類多様性の関係を探る

北海道大学大学院農学研究院 山浦悠一

長野の山村で生まれ育った私は、森や畑に棲む生き物といつも一緒だった。山を駆けずり回って地バチを追い、タラの芽やキノコを探し歩き、田畑でオニヤンマを待ち伏せ、カブト・クワガタ取りに熱中した。稲刈り時期には父と一緒にイナゴを袋一杯に捕まえた。鳥は手に取ることはできない対象だった。しかし、猛禽の鋭い眼差し、家で栽培しているウメモドキに大挙して押し寄せるヒヨドリやツグミ、冬しか会えないヒガラ、春先一時的に聞くクロジのさえずりなどはどれも印象的だった。

学生時代に心奪われたのは、当時大きな発展を遂げていた景観生態学だった。森林内部の構造や組成が鳥類多様性に及ぼす影響については、すでに多くの研究で明らかになっていた。分野の焦点は、よりマクロな景観構造の影響解明にシフトしつつあった。栃木県の里山景観・長野県での人工林景観での調査の結果、人工林は農地による森林の分断化の影響を緩和すること、残存天然林の配置の役割、天然林の周囲に広がる人工林の林分構造の重要性が明らかになった。これらの結果から、生息地の分断化の影響は、残存生息地を取り巻く区域—マトリックス—の管理によって緩和できることが示されたと考えている。

ポストク時代に挑戦したのはマクロ生態学だった。国家・世界レベルでの意思決定が求められる現代、この分野の重要性を強く感じていた。多くの人の多大な協力を仰ぎ、散在するデータを収集・整理して、環境省自然環境保全基礎調査のデータの解析を行なった。その結果、森林性鳥類は冷涼で高標高の地域に追いやられていると考えられた。同データの二時期の比較から、日本は東南アジアの森林を伐採して消失させて渡り鳥を減少させていたこと、一方で国内の森林は成熟して草地性の種が減少していることが示唆された。従来国家スケールでの鳥類多様性は気候や地形で決定されていると考えられてきた。しかし、これらの結果は、人間による土地利用は一国の鳥類多様性を左右するほど重要であることを示していると考えている。

広域・長期の調査では、各調査地・各年で調査努力量を揃えることが一般に困難で、これが解析上の大きな問題となっている。そこで近年、調査過程を考慮した解析手法の開発に取り組んでいる。例えば、個体数が多いと鳥種を発見しやすいことを逆手に取り、発見・非発見という二値データから、鳥類群集の個体数や種数を同時に推定する手法を開発した。本手法をあるバードウォッチャーが山火事跡地を9年間にわたって1,176回訪問した観察鳥種リストデータに適用し、鳥類多様性の回復過程を明らかにできた。

最後に、人口が減少を始め、外国に資源を依存した日本の将来について考えたい。現在、日本は成熟した森林でびっしりと覆われた、森林国中の森林国である。しかし近年、最終氷期からほんの数十年前まで—2万年以上にわたって—、草地は日本の重要な生態系・土地利用だったという指摘がなされるようになった。戦後経済的な役割を失った草地は全国的に激減した。日本はすっかり見晴らしが悪くなってしまった。講演では、この「日本草地仮説」について北海道を含めて考え、今後の林業の役割について論じたい。